

積層する住まい

- 団地上層部を地盤としたまちの骨格となる住宅街 -

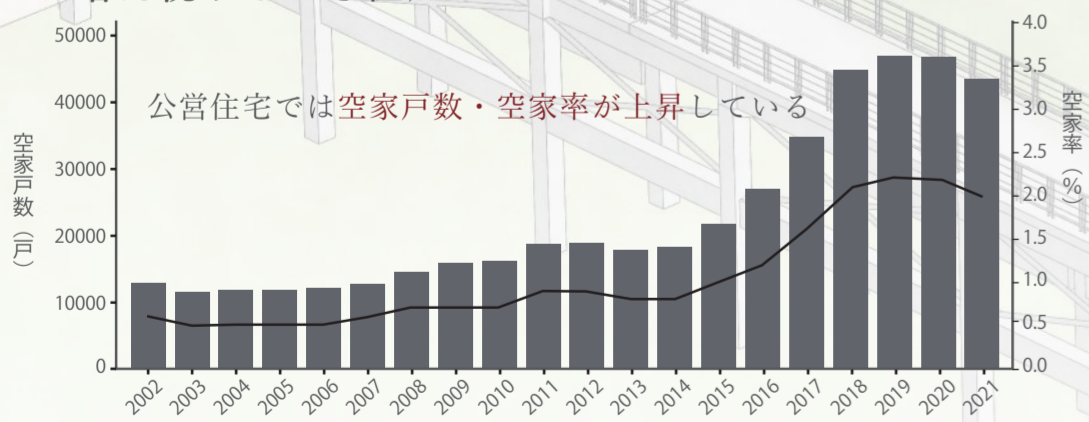
グループ名：都市デルタ総合研究所
山畑璃紗 小野あんり 箕輪穂 由利真理



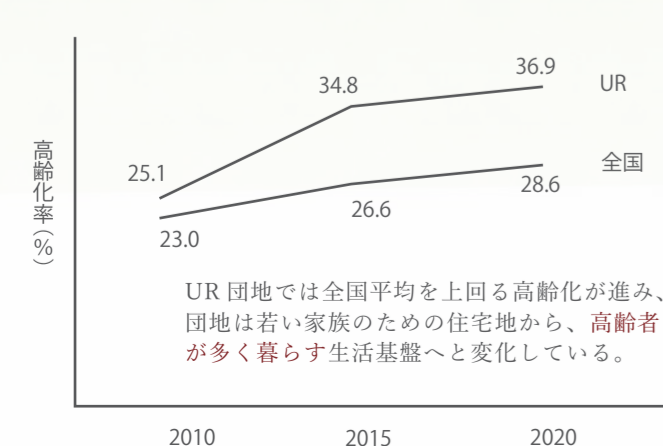
高齢化や空き住戸の増加、起伏ある地形による移動負担に対し、居住機能を下層部へ集約し、団地上層部を新たな地盤として捉え、周辺住宅地や小学校をつなぎ合わせる新しい住宅街を計画する。既存の谷戸地形と団地を残しながら、新たな住宅街の層が重なる風景がまちの骨格として広がる。

01 団地が抱える問題点 - 空き住戸の増加と高齢化 -

● 増え続ける空き住戸



● 高齢化する団地居住者



02 変わる暮らし、変わらない団地

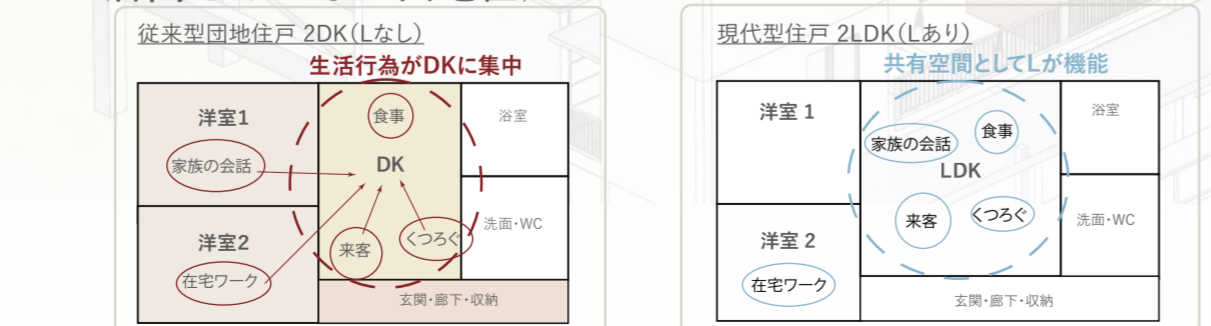
● 単身化する世帯構成

従来：家族世帯中心 現在：単身・少人数世帯中心



世帯は「夫婦+子ども」を中心とした家族単位から、単身・少人数世帯へと移行している。住戸にも、個人単位の暮らしを受け止める柔軟性が求められる。

● 居間をもたない団地住戸



Lの不在 → DKへの機能集中・個室への機能流出 → 現代のライフスタイルとのミスマッチ

従来の2DK型住戸では、食事・くつろぎ・来客・在宅ワークなどの行為がDKや個室に重なり、現代の生活行為を受け止める共有空間が不足している。

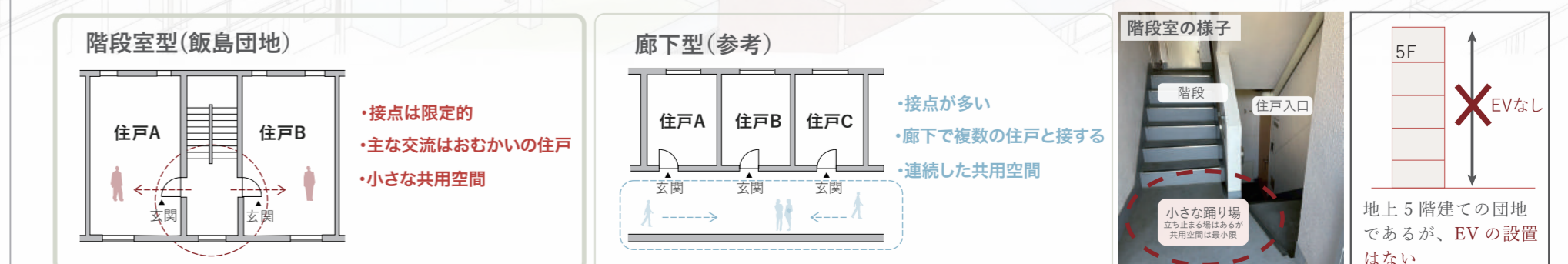
03 対象地：飯島団地 - 谷戸に建ち並ぶ団地 -

● 谷戸地域特有の高低差

神奈川県横浜市栄区にある飯島団地の敷地全体には、谷戸地域特有の高低差があり、団地内での移動は高齢者にとって負担になっている



● 閉じた階段室型の団地

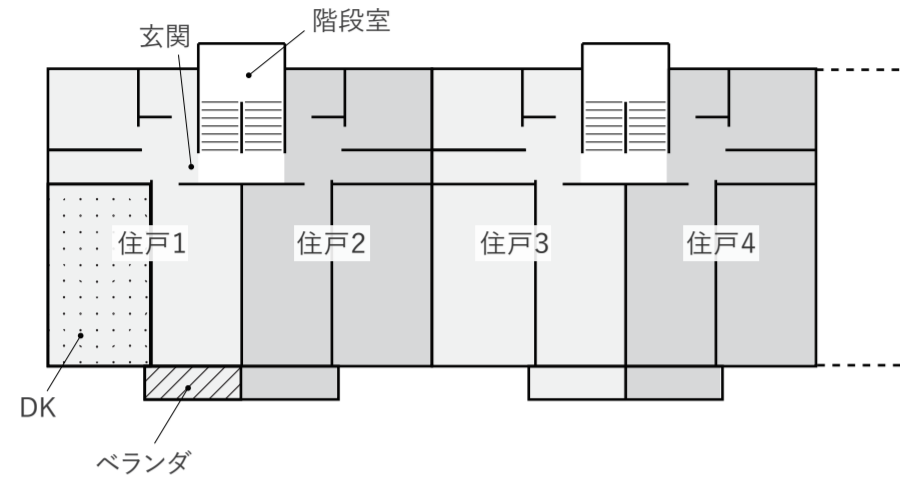


06 上層部設計ダイアグラム - 団地の記憶継承と現代の住戸単位への再編 -

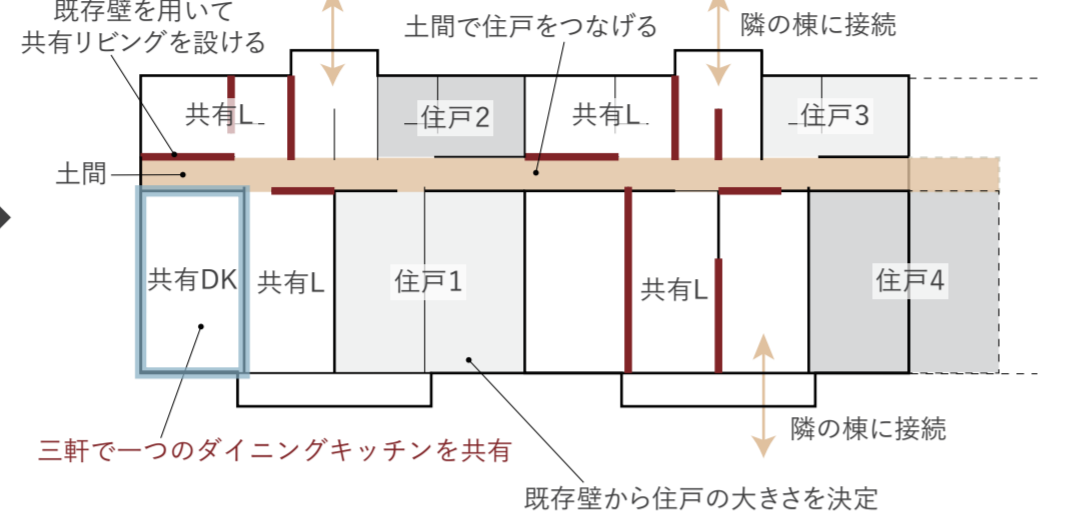
既存団地の壁や機能を残すことで、団地の記憶を空間として継承しつつ、現代の生活に合わせた住戸単位の再編を行う。
 団地特有のモジュールや機能によって、これまでとは異なる共有型の住宅街を構築する。

設計手法

既存団地
 ・単一住戸が並び
 ・2DKや3DKが主流でLを持たない間取り



本計画
 壁を選択的に残し、団地の空間性を継承しつつ、これまでの団地になかったリビング(L)を配置する。また、既存壁や機能を用いて、新たな居住単位を構築する。



08 共有リビングの使い方 - 団地の壁の残し方によって多様化する空間 -

団地の壁を用いてつくる共有リビングは、壁の残し方で開放度が異なり、多様な空間の使い方が見られる。

I. 寄り道・遊び場 (開放型)

動線方向に開放的な空間で、住民や地域の人など多様な人の交流拠点となる。壁を空間を分ける仕切りとして用いる。壁を利用したアクティビティの場ともなる。

II. 体験教室 (半開放)

土間に平行な小さな壁により土間を仕切りつつも視線が抜け、立ち寄りやすい空間となる。土間に水平な壁は、通りかかった人々のたまり場となる。大きさの異なる壁により、関係を緩くつなぐ。

III. 麻雀 (半開放型)

土間に開放的で、複数人で集まる拠点となる。居室からのアクセスはもう一層の小さな壁で緩く仕切られ、セミプライベートな空間ももつ。

IV. 家庭菜園と読書 (半閉鎖型)

開いた空間では、土間からシームレスにつながり、住民同士の交流が生まれる。一方で、同様の空間に土間と平行に置かれた壁があることで、半プライベートな空間も共存する。2つの活動が見える。

V. 洗濯干し (半閉鎖型)

土間からの視線の抜けがあることで、交流がしやすい一方で、プライベートな空間としても捉えられ、両者の要素を包含した活動が見られる。

VI. リモートワーク (閉鎖型)

土間に平行な大きい壁により、土間からの視線を遮断しつつ、開放的な半個室のような空間となり、プライベート性が高い。

07 平面計画 - 既存壁が作る新しい住戸単位 -



09 団地の多様な交流関係

